

日本

ハンザキ研究所ニュース 2011(10) : 通巻 No. 70



発行2011年10月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

第3回のキノコ観察会

一昨年までシーズンになると入山禁止の縄張りがなされていた山に、昨シーズンは縄が張られませんでした。山主さんに聞くとあまり採れないので止めたそうです。それでは入山してもかまいませんかと伺うと OK が出ました。万が一にもマツタケが1本でも生えているかもしれないとの期待をこめて、今年のキノコ観察会は元・マツタケ山で開催することにしました。応募が多すぎて困ることになるのではないかと心配したのですが、意外なことに5組15人の参加希望でした。どうも“元・マツタケ山で・・・”というキャッチフレーズが少々眉唾物として敬遠されたのかもしれませんが。事務局長は張り切って9月15日の縄張り日から毎日のように下見に行っては1本2本と見つけてストックしてくれました。これなら観察会当日にも1本くらいは見ることができそうだと期待が膨らんだのです。



大マツタケと記念撮影

当日は、天気予報のとおり雨になりましたが、山に入っている間だけ降りませんでした。本当にラッキーなことでしたが、マツタケのほうも大きな立派な物が見つかり、皆歓声をあげてキノコの観察の方は程ほどにして下山してしまいました。昼食にはマツタケの吸い物と焼きたてホヤホヤが出て皆さんも大満足していただけたようでした。午後からは、横山・宇那木両講師の同定や毒か食用かといった話を聞いて、20種ほどの本日の成果を観察しました。中でもスッポンタケは、今回初めての登場（3回の観察会で）でしたが、臭い粘液を笠にタププリ出してハエが止まっていたのですが食用になるということ喜んで柄の部分を持ち帰った人がいました。柄は笠からも球根のような部分からもスッポンと簡単に抜けてしまうので何とも奇妙なキノコだと思いました。さて、お味の方はどうだったのでしょうか？ 後日談を聞いてみたいと思います。



写真1 マツタケに会うのは大変だ (キノコ観察会)



写真2 大マツタケ (206g) のホルマリン漬け標本



写真3 移設した観察カメラ



写真4 水面に写りこむガードレール



写真5 水中カメラのデモ



写真6 フッキングした卵塊



写真7 スッポンタケ



写真8 ボランティアの手で綺麗に塗装されたハンザキ橋



写真9 キリの蕾



写真10 オオサンショウウオの会 in 瀬戸市大会



写真11 地域の皆さん心づくしの“マコモダケ飯”



写真12 名古屋市東山動物園の見学

黒主くんゴメンナサイ！！！！

我がハンザキ研への国道429からの入り口“ハンザキ橋”下流側の“アンコ淵”の主である黒主は今年も全長が99㌢で7年間成長が見られないのは、子作りにエネルギーを費やしてしまっているのだろうと以前に書いた。しかし、今年も9月13日に繁殖パーティがあったようで、14日からはアンコ淵周辺は静まり返った。黒主が時々姿を見せるが、浅瀬で一呼吸してすぐに巣穴に戻ってしまう。これは例年の事ながら卵塊を守っている時のパターンだ。しかし、本当に産卵が行われて卵が順調に発生しているのかどうかは分からない。発生の初期に卵を触ると悪い結果になるようなので、例年、孵化間近かな10月中旬に確認することになっている。9月8日に下流域で収容した流出卵75粒は次々に水生菌が発生して月末までに全滅してしまった。昨年も同様なことがあり、産卵して間もなく流れ出してしまった卵は、もまれたりしてうまく発生しないようだ。

この5年間アンコ淵の繁殖を確認してきたが、いずれも10月の半ば頃、水温が15℃前後と冷たくなってきた時期だ。アンコ淵は渇水状態でも水深が1.5㌢はあって、潜ると言うほどのことではないが、逆立ちして息を止めて3.5㌢もある奥深い巣穴から卵をフッキング（長さ4㌢のエンピ・パイプの先に針金のフックを付けた道具で）するのは大変なのだ。一昨年から何とか潜らずにやる方法を工夫してみた。パイプにエルボウを付けて3㌢ほどの柄を付けた物だ。真っ直ぐな巣穴とはいえ岩の隙間にできた物だから中々うまく指しこむことができないが、何とか毎年20~30卵を引っ掛けることができて、繁殖を確認してきた。この卵を孵化させて5年ほど飼育し変態が終わった頃にマイクロチップを挿入して放流することを繰り返している。100年後か150年後かにそれらの個体が発見されることで寿命が分かることを願ってのことだ。

今年も、新兵器の小型水中カメラを入れて観察しようと試みたが、コードのつなぎ目から水が入ってしまったようで、うまくいかなかった。結局例年通りフッキングを試みた。6・2・10卵と3回のフックで卵が出てきた。もう少し卵をと4回目のフックにはなんと600卵ほどが引っかかって出てきてしまった。戻すこともできないので水槽に収容したが、卵内では胚が一斉に盛んに動き回っている。背中には黒い色素がウッスラと出ており孵化間近なことを示していた。600卵と言えば1又は2匹のメスの産卵数になるが、全部取り出してしまったのなら黒主くんは怒っていることだろう。ゴメンナサイ！

25日現在10匹ほどの幼生が孵化し、次第に孵化数が増加して水面に泡の塊ができています。収容後に死んだ卵は1粒のみで、取り出した時にも4卵ほどしか死んでいなかった。このまま行けばほぼ100%の孵化となるだろう。河川内で繁殖巣穴から幼生が河川内に出現するのは1年半ば頃からなので、その頃には大部分の幼生を川へ戻す予定である。しかし、90㌢定型水槽内では素晴らしい光景に感動を覚える。私自身何度も見ているのだが、何回見ても素晴らしい物だと思う。この生き物を滅ぼしてはいけない、日本が世界に誇れるハンザキを永遠に守って行きたいと思わさせられる。

日本オオサンショウウオの会第8回大会 in 瀬戸市 (愛知県)

今年から“日本・・・”と言う頭が付きましたがハンザキの全国大会です。瀬戸市は“せともの”の産地なのですが、岐阜県境にある下半田川町を流れる庄内川の支流になる蛇ヶ洞川(じゃがほらがわ)はハンザキの分布東限として辞書の王様と言われている広辞苑の最新版には記載されています。庄内川は焼き物の材料の粘土のシルトが流れて“白い川”と、かつては呼ばれていました。その支流になる蛇ヶ洞川は“フェロシルト”と呼ばれた埋め立て材が雨で流れて“赤い川”としてマスコミに喧伝されたことがありましたが、ハンザキの生息が知られてからは、環境の改善が図られてきました。

2006年から3年間、文化庁の補助をいただいて生息調査が実施された川で、私も参加しましたが、中流域にのみ生息が確認できたと言う状況で、産卵孵化も確認できていますが、どうも次世代が育っていないのではないかと言う疑いがあります。地元の皆さんが“瀬戸のサンショウウオを愛する会”を結成して観察を続けられていた川でもあり、名古屋市東山動物園のチームも調査に入っていました。この川は下流域では採石場から大量の石の粉が流れ込んでおり、生き物の生息を阻害しています。また、上流域は水が無かったり、泥っぽい環境でアメリカザリガニやウシガエルのオタマジャクシが沢山生息していると言う変わった川でもあります。更にすさまじいのは、河岸の斜面はあらゆる家具、日用品のオンパレードといってもいいくらいのゴミの不法投棄の場となっていたのです。この環境を改善するために瀬戸市の文化課と環境課が共同して頑張って、環境の回復をしてきた所でもあります。

まずは、河岸のごみの清掃が行われて陸上環境は改善されました。今回のオオサンショウウオの会の全国大会を機会にさらに弾みがついて、河川内の環境がオオサンショウウオの生息にふさわしい状態になってほしい物です。地域の皆さんもマコモの陰に潜むハンザキをデザインした揃いのジャンパーを着て、マコモを炊き込んだ“マコモダケ飯”で歓迎してくれました。当日は、瀬戸市の市制記念日と言うことで市長、市議会議長、県議員など多忙な方々がお揃いで祝辞をいただきました。良い機会でしたので、市長さんには河川内の環境再生の努力をお願いしておきました。

大会のほうは、東山動物園の藤谷武史さんの“蛇ヶ洞川の調査”についての記念講演があり、各地から14題の事例や研究発表が行われ、150名ほどの参会者もあり盛大に実施されました。2日目は東山動物園の施設見学をさせていただきましたが、日曜日でもあり混雑する中を担当の飼育係の方から楽屋も含めて丁寧に解説していただきました。来年は山口県岩国市で錦川のオオサンショウウオの会の皆さんが張り切って準備を始めているようですし、第10回大会はハイブリッドのカモガワ・ハンザキのホームグラウンドである京都市が予定されています。今回は私どもハンザキ研が初めての本部事務局としての大会で、不慣れな所もあったかと思いますが、開催地事務局の皆様方のおかげもあり無事に終了できてほっとしております。

ハンザキの観察カメラ

アンコ淵の巣穴周辺の観察をするために、ハンザキ橋の下にカメラを設置して、パソコンの画面でモニタリングして楽しんでいる。今年は5月の台風以後3回もの大水が出て、そのたびにカメラの心配をしてきた。カメラだけでなく巣穴の真上にぶら下げた照明も一度は流されてしまった苦い経験がある。ガードレールとハンザキ橋の欄干の間、30 ㎝ほどにロープを張ってライトを吊り下げているのだが、大雨のたびに収納するのが大変なのである。無論、研究所から 50 ㎝ほどの距離に繁殖巣穴があつて電気を引けるなんて立地条件は申し分の無いことで、普通は不可能なことだ。これを活用することができるのだからと、色々と工夫してきた。

まず、ライトの吊り下げ用のロープだが、標識ロープ（通称トラ・ロープ）を使ってきたが劣化とライトの重量（7 ㎏）で伸びてしまい水面に近づいてしまう。ワイヤーに取り替えたいと考えていたら、うまいタイミングにアナログテレビ切り替えで、当NPO会員の電気屋さんが電柱から外した大量の中古品があるという。早速、積み上げられたワイヤーや止め金具などをいただいてきたが、ワイヤーの末端部の細工の方法を教えていただいた。全くうまくできており、私の素人工事でもワイヤーをピンと張ることができた。これで滑車を使って簡単にライトを出し入れできるようになった。たるむことも無く、ライトの高さも自由に調節できるようになった。

ライトも LED100 ワット球 7 個を付けてタコ足配線で苦労して明るさを確保してきたのだが、1 個で 700 ワットの明るさが出て、フィラメント無しなので永久的に使えるという新兵器の売込みがあった。駐車場などの照明に使っているものだそうで、防水型でもあり比較的軽い重量で扱いやすい物なので採用した。ところが防水型というのに中に水が溜ったのである。下に向けているからガラス面に溜るので漏電はしなかったが、取り替えた 2 台目、3 台目も水漏れや結露をしたのである。駐車場などでは取り付けて明かりさえついていれば誰も点検しないので気付かないのだろう。大慌てで飛んできたメーカーの職員も首を捻っていたが、これも今後の課題であろう。

橋の下部に取り付けていたカメラを、思い切って外して、カラーフェンスに単管を取り付けて高い位置に変えてみた。これまでは斜め横の低い位置から覗き見ていたアンコ淵をかなり真上から見下ろすようなアングルになった。巣穴の出入り口の真正面から見下ろすので黒主の出入りが丸見えだ。ただ、今までは橋の下側からなので、ハンザキ橋の上下流各 50 ㎝を見渡せたのが下流側だけになったのは致し方ない。また、意外なトラブルも出てきた。川向こうの白いガードレールが巣穴の出入り口にピカッと目隠しのように写り込んでしまうのである。兵庫県養父土木事務所に相談すると、ガードレールの裏側なら暗い色に塗ることは前例があるので、申請してほしいとのことで、これも解決できた。簡単に思うようには行かないが、このように色々試行錯誤しながら楽しんでもいる。だが、まだまだ解決しなくてはならない問題もあるのだ。落ち葉の漂う季節、水面を覆ってしまう。

キ リ

キリの花は素敵だ。大木の枝先に薄紫の花を見ることができるのは、当地では5月下旬のことである。ハンザキ研の縁側の下からニョキニョキとあつという間に伸びてくるキリの木は、毎年のようにカットされていた。私が、この教員宿舎として残されていた建物にハンザキ研究所と称して棲みついてからは、縁側の板を外して伸びるのに任せて4年になる。まだ木が小さい時には夏の日差しがもろに室内に入ってきており、ビーチ・パラソルを陽よけに使っていたこともあった。キリの木は葉っぱが大きいので陽よけにはもってこいだ。今年流行のゴーヤなんて物の数ではないのだが、街中ではキリの大木は無理がある。しかし、ここ生野の山の中、廃校の跡には十分な広さがあるのだ。私は、キリを伐らないで伸ばすことにしたのである。

昨年の秋には、枝先に冬芽ができたのかと想像していたら、蕾だったのである。何とも早い蕾の出現なのだ。今年は伸ばした枝が大きく広がって、何しろ一年で4～5センチも枝が伸びるのであるから宿舎のはるか上空にまで伸びている。一方で、日除け代わりに枝を剪定していたら地面を這うように伸びた枝先にまで蕾が沢山付いている。無数の蕾の存在は来春の？初夏の？一斉開花を思わせてくれる。素晴らしい薄紫のカーテンが出現することだろう。写真9が今の時期の蕾の様子だが、花見時の素晴らしい写真を皆様にもお届けしたい物だ。ご期待ください。

.....

作業ボランティア 10月

今年からはじめた整備のための作業をボランティアに託すことを6月から行っている。どんなことになるのかと想像していたが、順調な滑り出しだと思う。常連となった神戸市の上田さんと姫路市の澤田さん、そして強力な高校生パワーを引き連れた龍野北高校の山内先生などの力で整備が進んでいる。多くの会員の皆さんにも一度くらいは参加してみようかといった軽い気持ちでの参加をお願いしておきます。

今月は、6月からの作業であったハンザキ橋の欄干の塗装が完成しました。はげかけているペンキをサンダーで削り、さび止めを塗ってようやくペンキ塗りで仕上がりました。この欄干は平成17年に私が来た時にはペロペロに剥けて見るも無残な姿だったので。ヘラで剥がれかけたペンキを落として、さび止めを塗ったところで力尽きて放置していた所です。それから4年、さび止めの下から錆びが浮き上がってきていたところでした。青色の欄干がさび止めの茶色になって、今回は暗褐色に塗り上げました。周囲の景観にも溶け込んで中々良い雰囲気の上げになりました。

一人の人間にできることは高が知れています。今後とも多くの方々の力を借りてより一層の整備を進めていきたいと考えています。スタッフや会員以外の方々の参加もあって、大変感動しています。

ハンザキ研日誌

2011年10月

- 1日 日本オオサンショウウオの会第8回大会・愛知県瀬戸市にて～2日
- 2日 同上 名古屋市東山動物園の見学など
- 4日 11月の植物観察会の下見に講師の前田常雄先生夫妻来所
- 6日 日本テレビ一行カモガワ・ハンザキ取材 (12日、関東圏で放映)
- 8日 宍粟市のNPO法人WOOD NOTE主催で“河川工事”について講演
- 12日 22日のキノコ観察会の下見で事務局長マツタケ確認
- 13日 ポンプ・ピットのサンド・ポンプによる排砂テスト実施、上々の結果だった
- 15日 兵庫エコフェスタ出展、神戸メリケンパークにて～16日、各4名で
- 17日 アンコ淵でフッキング、黒主が守る卵塊約600粒を引っ掛けてしまった
- 20日 カモガワ・ハンザキ2個体搬入
- 21日 兵庫県養父土木事務所へハンザキの飼育管理報告書提出 (4月～8月)
- 22日 第3回キノコ観察会、横山・宇那木両講師と参加4組14名、スタッフ4名
- 23日 兵庫県生物学会、15名視察に、11～15時
- 24日 新名神道路建設事務所8名視察に、12～15時
- 26日 大阪府安威川ダム建設所4名会議事前の打ち合わせに来所、17～19時
- 27日 ついにケータイで鎖につながれてしまう (ソフトバンクですが)
- 29日 作業ボランティア、3組6人とスタッフ4人でハンザキ橋の塗装など

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

すったもんだの末に校庭のソフトバンクのケータイ用アンテナが稼動し始めた。今年の2月にアンテナ柱の位置を決めて来た人は4月頃に動き出すでしょうと言っていたのだが。半年も遅れたのは緑陰のおかげではなかったように思う。“協力会社”なる言葉が流行したが“したうけ”会社のことなのだ。協力してくれる会社なんて素晴らしい関係のように思わせられる。実状はいかに？なんて言っても始まらないだろうが、縦割りの協力会社の弊害を如実に見せられた。その度に付き合わされる当方もいい迷惑だった。ともあれ、とうとう携帯をいやケータイを携帯させられることになったのだ。

ハンザキ研に住み着くようになってから1年間は電話を引かなかった。静かな良い時間を過ごすことができたのだった。しかし、NPOの組織化などが進み、連絡ができないとの苦情が殺到することになり、電話とファックスが付いた。電話が鳴るとつい急いで駆けつけようとする習性が抜けていなかったが、受話器にたどり着いたと同時に切れたりファックスだったり、間違い電話だったりする。最近手の届く範囲であれば受話器を取るがそうでなければ無視だ。メールくらい見てくださいということからメールの返事くらいくださいということになり、今度はケータイで繋がれることになってしまった。世の中は便利さを追求し続けているようだが、私には無縁の世界のように思える・・・